

冬日記

原民喜

青空文庫

真白い西洋紙を展^{ひろ}げて、その上に落ちてくる午後の光線をぼんやり眺^{なが}めていると、眼はその紙のなかに吸込まれて行くようで、心はかすかな光線のうつろいに悶^{もだ}えているのであった。紙を展^のべた机は塵^{ちり}一つない、清らかな、冷たい触感を湛^{たた}えた儘^{まま}、彼の前にあつた。障子の硝子越^{ガラスご}しに、穠^{もち}の樹が見え、その樹の上の空に青白い雲がただよっているらしいことが光線の具合で感じられる。冷え冷えとして、今にも時雨^{しぐれ}が降りだしそうな時刻であつた。廊下を隔てた隣室の方では、さきほどまで妻と女中の話声がしていたが、今はひっそりとしている。端近い近壁の家々も不思議に静かである。何か書きはじめるなら今だ。今なら深い文章の脈が浮

上つて来るであろう。だが、何故かすぐにペンを紙の上に走らすことは躊躇ちゆうちよされた。西洋紙は視みつめているほどに青味を帯びて来て、そのなかには数々の幻影が潜んでいそうだ。弱々しく神経を消耗させて滅びて行く男の話、ものに脅おそえものに憑つかれて死んでゆく友の話、いずれも失敗者の姿ばかりが彼の心には浮ぶのであつた。……時雨に濡ぬれて枯野を行く昔の漂泊詩人の面影がふと浮んで来る、気がつくと恰ちやうど度ハラハラと降りだしたのである。そして今、露次の方に登あしおと音がして、それが玄関の方へ近づいて来ると、彼はハツとして、きき慣れた登音がその次にともなう動作をすぐ予想した。やがて玄関の戸がひらき、牛乳ぎゆうにゆうびん壺つばを置く音がする。かすかにかち合う壺の音と「こんちは」と眩つぶやく低い

声がするのである。彼はずしんと、真空に投出されたような気持になる。微かすかにかち合う墮の音がまだ心の中で鳴りひびき、遠ざかつて行く蹙音が絶望的に耳に残る。それは毎日殆ど同じ時刻に同じ動作で現れ、それを同じ状態の下にきく彼であった。だが、このものの音を区切りにやがてあたりの状態は少しずつ變つて行く。バタンと乱暴に戸の開く音がして、けたたましい声で前の家の主婦は喋りだす。すると、もう何処どこでも夕餉ゆうげの支度したくにとりかかる時刻らしかった。雨は歇やんだようだが、廊下の方に暮色がしのびよつて来て、もう展ひろげた紙の上にあつた微妙な美しい青も消え失せている。手を伸べて、スタンドのスイッチを捻ひねればよさそうであったが、それさえ彼には躊躇うずくまされた。薄暗くなる部屋に蹲うずくまつたま

ま、彼はじりじりとももの狂おしい想いを堪えた。ものを書こうとして、書こうとしては躊躇し、この二三年をいつのまにか空費してしまつた彼は、今もその躊躇の跡をいぶかりながら吟味しているのであつたが、——時にこの悶えは娛しくもあつたが、更により悲痛でもあつたのだ。「黄昏は狂人たちを煽情する」とボオドレエルの散文詩にある老人のように、失意のうちに年老いてじりじりと夕暮を迎えねばならぬとしたら、——彼はそれかも知れない。他人事ではないように思えた。「マルテの手記」にある瘵癩する老人が彼の方に近づいて来そうであつた。

『ベルリン——ロオマ行の急行列車が、ある中位な駅の構内に進

み入ったのは、曇った薄暗い肌寒い時刻だった。幅の広い、粗天あらび驚絨ろうどの安楽椅子にレエスの覆いおおを掛けた一等の車室で、或る独りひと旅たびの客が身を起した——アルブレヒト・ファンクワアレンである。彼は眼を醒さましたのである』

夕食後、彼は妻の枕まくら許もとでトオマス・マンの「衣裳戸棚いしやうとだな」の冒頭を暗誦あんしやうしてきかせた。女中のたつは通いで夜は帰って行ったから、その部屋はいま二人きりの領分であった。病気の妻はギラギラと眼を輝かし、彼の言葉に耳傾けていたが「絶唱だね」と彼がつけ加えると、それが他人の作品だと分り多少あきたらな
い面持にかえったが、猶なほも彼の意中をさぐろうとするように、凝じつと空間を見詰めている。長い間、彼は何も書こうとしないが、ま

だ書こうとする熱意を喪つてはいないのだろうか——そう妻は無言のうちたずに訊ねているようであつた。だが、それはそれとして、妻も「衣裳戸棚」の旅の話を知っていた。あのような奇怪な絶望のはての娯たのしい旅へ出られたら、——それはこの頃二人に共通する夢でもあつた。じりじりと押迫つて来る何か不吉なものが、今にもこの小さな生活を覆くつがえしそうな秋であつた。台所の硝子戸にドタンと風のあたる音がして、遠くの方にヒューツと唸うなこがらしる風の音がする。電車が軋きしりながらすぐ近くの小駅に近づいて来る。不思議に外部のもの音が心に喰くいこ込んで来る。すると急に電灯のあかりが薄暗く感じられ、見慣れた部屋の壁の色がおそろしく冴さえているのだ。ここには妻の一日の憂鬱ゆううつがすっかり立籠たちこもっている。妻

もまたこの二三年を病の床で暮し、来る日来る日をさびしく見送っているのだった。日によつて、頬ほおが火照つたり、そうして、その後ではきつと熱が高かつたが、些ささい細なことがらがひどく気に懸かかることがある。かと思うと、ふと爽さわやかな恢復期かいふくきの兆きざしが見えたりして、病氣は絶えず一進一退していた。寝たままで、女中のたつを口で使っていたが、おつかいから帰つて来るたつは、變動してゆく外の空気をいつも妻に語りつたえた。そうして、妻の焦しょう躁そうは無言の時、一ひととき際はつきりと彼の方へ反映して来るようであつた。その高い額の押黙つて電灯に晒さらされている姿が、今も何となく彼には堪えがたくなる。彼はふと思いついたように座を立て、毎日の習慣である冷水摩擦の用意にとりかかる。タオルを

堅く洗面器の上で絞ると、シイツの上に両足を投出している妻の方へ持つて行き、足さきの方から皮膚をこすつて行くのであつたが、膝ひざから脇腹わきばらの方へ進むに随したがつて、妻の下半身の表情がおもむろに現れて来る。彼はそれを愛撫あいぶするといふよりも、何か器具の光沢を磨みがいているような錯覚に陥りながら、やがて摩擦は上半身へ移つて行く。すると、ここにはまるで少女のように細っそりした胸があり、背の方の筋肉は無表情の儘であるが、やがて首筋のあたりを撫なでて行くと、妻は頤あごを反そらして、快げに眼を細めてゐる。こうして、摩擦は完了する。この肉体的接触の後の爽やかさが、どうやらお互の気分をかすかに落着かすのではあつたが……。

青黒い水の上を滑^{すべ}つて行く汽船が、悲しい情緒に咽^{むせ}びながら、港らしいところへ這^{はい}入つて行く。ぎつしりと詰つた旅客たちの間に挿^{はさ}まれ、彼も岸の方へ進んで行くのだが、彼の旅行鞆^{りょこうかばん}には小さな袋に入れた糸瓜^{へちま}の種が這入つていて、その白い種の姿がはつきりと目にちらついてならない。その上、その種はある神秘な力があつて、彼の固疾にはなくてはならない良薬なのだし、それを今持運んでいるということが、かぎりない慰を与えてくれるとともに、何ともいえない不安な気持をそそのる。狭い暗い棧橋を渡つたかと思うと更に心細げな路^{みちよこた}が横わり、つづいてまた水の見える場所に来ている。そうして、暫^{しばら}くすると、彼はまたはてしない

汽船の旅をつづけているのであった。

——夏の頃、彼は窓の下にへちまの種を蒔まいて、瘦やせ土つちに生長して行く植物の姿を、つくづくと、まるで憑つかれたように眺めていた。織ほそい蔓つるの尖せん端たんが宙に浮んで、何かまきつくものをさがしている、そのかぼそいものいとなみは見ているものの心をうつとりとさせるのであったが、どうかするとかすかな苦悩をともなつて来るのもあった。この二三年彼の顔の皮膚をほしいままに荒らしている湿疹も、微妙なるものの営みではあった。それは殆ど癒いえかけてはいたが、ちよつとした気温の変動でも直すぐに応じて来た。たとえば、雨の近い夕方、息をしているのも不思議なよはうな一刻、微かに皮膚の下側を匍はい廻るものけはいがあつて、

それをじつと怵こらえていると、今にも神経は張裂けそうになるのであつた。……固疾からに絡かまる哀かなしい夢をみたので、彼の心は茫ぼう然ぜんとしていたが、くるんでいる毛布けふの妙たに生暖なかいのがまた雨あめの近しい徴しるしのように想おもえた。暫しばらくくすると、また明け方の夢ゆめが現あられた。

ぎっしりと人々の押込おめられた乗合自動車りゆうごうが緩ゆるい勾こう配ばいをなした電車軌道でんしゃの脇わきを異常いじょうな緊迫感きんぱくで疾走しきしている。そこは郷里きやうりの街の一部いぶで、少し行くと河がに出る道みちだということが先程さきから彼かれにはわかつている。が、そういうことを考えている暇ひまもなく、いきなり烈はげしいもの音ねの予感よかんに戦たたかく。忽たちまち轟ごう音おんとともに自動車じゆうごうが猛煙まうえんにつつまれた。人々ひとはことごとく木端微塵こつぱみじんになつている。それなのに、彼かれだけがひとり不思議ふしぎに助たすかつている。おおらかな感銘かんとくの

濛ただよつているのも束つかの間で、やがて四辺は修羅場しゅらじょうと化す。烈しい火焰かえんの下をくぐり抜け、叫び、彼は向側へつき抜けて行く。向側へ。この不思議な装置の重圧する機械はゆるゆると地下を匍うい、それ故ゆえ、全身はさかしまに吊つるされながら暗黒の中を匍うって行く。苦しい喘あえぎと身悶みもだえの末、更に恐しい音響が破裂する。ここですべては消滅し、やがて再び気がつくとき、彼はある老練な歯科医の椅子の上に辿たどり着いていたのであった。

——その日、彼はそれらの夢を小さな手帳に書きとめておいた。その手帳は、日記の役割をしていたが、気象に関する記録と夢の採集のほかは、故意に世相への感想を避けていた。だが夢ははつきりとする感想を述べているのもあった。誰しもが避け難い破

滅を予感し、ひそかに救済を祈っているのではあるまいか。その夢の最後に現れて来る歯科医は妻も知っている人物であった。少しでも患者が痛そうな表情をすると手を休め、その癖、少しずつ確実に手術を為し遂げてゆく巧みな医者であった。ふと、彼は妻にみた夢の内容を語りたい誘惑を覚えた。しかし、それを話せば、頭上に迫っている更に酷しいものの印象を強めるだけのことであった。

『そのとき天の方では、日の沈む側に雲が叢つていた。その一つは凱旋門に似ていて、次のはライオンに、三番目のは鋏はさみに似ている。……雲の後から幅のひろい緑色の光が射して、空の央なかばまで達している。暫くするとこの光は紫色の光が来て並ぶ。その隣

には金色のが、それから薔薇色ばらいろのが。が空はやがて柔かな紫ライラック丁香色ククになる。この魅するばかりの華麗な空を見て、はじめ大洋は顰しかめ面つらをする。が、間もなく海面も、優しい、悦ばしい、情熱的な——とても人間の言葉では名指なざすことの出来ぬ色合になる』

彼はとても人間の言葉では名指すことの出来ぬ情熱的な色合をしきりに想い浮べていた。すると目の前に、鱻ふかの餌食えじきと化するはかない人間の姿と、チエーホフの心の色合が海底のように見えて来るのだった。そして、三年前彼がはじめて「グーセフ」を読んだ時から残のこされている骨を刺すような冷やかなものと疼うずくような熱さがまた身裡みうちに甦よみがえつて来るのもあつた。奇妙なことに、それを讀んだ三年前の季節の部屋の容子とその頃の心のありさままで

こまごまと彼には回想されるのであったが、それは殆ど現在の彼と異つていないようでもあつた。その頃、彼は一度東京へ出て知人を訪ねようと思つていた。がたつたそれだけのことが彼にとつてはなかなか決行できなかつた。電車で行けば一時間あまりのところにある地点が彼には無限のかなたにあるもののように想像されたし、もしかするとその都会は一夜のうちに消滅しているかもしれないと、妄想もうそうは更に飛躍して行つた。もの音の杜絶とぜつした夜半、泥海と茫漠ぼうぼくたる野づらの涯はてしなくつづくその土地の妖あやしい空気をすぐ外に感じながら、ひとりですんなことを考えていると、都会の兇きよう悪あくな相貌さうめいがぐるぐると胸裡を駆けめぐりそれは一瞬たりとも彼のようなものものの拠よりつけそうにない場所ばしょに變つて

いた。そこには今では、彼にとつて全く無縁のものや、激しく彼を拒否しようとするもののみが満ち溢あふれていた。それでなくても、顔の固疾や、脆ぜい弱じやくな體質が出足を鈍らすのであったが、着つけない服をつけ、久し振りに靴を穿はいて出掛ける時には、まるで大旅行に出て行くように悲壮な気持がしたものであった。……鱧の泳ぎ廻る海底の姿と黙示録の幻影がいつまでも重たく彼の心にかさなり合っていた。

生涯のある時期に於おいて、教師をするということは、僕にとつて予定されていたことかも知れませんが、とにかく、やってみるつもりです。——彼はある朝、ひっそりとした時刻に、友人に對むかつ

てこんな手紙を書いた。そしてペンを擱くと、障子の硝子の向うに見える空が、いまだこまでも白く寒々と無限に展が^{ひろ}つてゆくように想えた。あの寒々とした中に、以前からこの予言は誌^{しる}されていたのであろうか——近く始ろうとする教師の姿をぼんやり考えてみた。殆ど何の自信も期待も持てなかつたが、それでも、そこへ強^しいてゆくものが、たしかにあつた。彼の安静な、そしてまた業苦多い、孤独の二^{さん}昧^{まい}境^{きょう}は既にこの二三年前から内からも外からも少しずつ破壊されていた。ある時は猛然と立つて、敵を防ごうとしたが、空白の中に行詰つてゆく心理は、死守しようとするものを自ら弱めて行っているのもあつた。（だが、彼の力の絶したところに、やはり死守すべきものがあることだけは疑えな

かった）生計の不安や激変の世の姿が今怒濤どとうとなつて身边にあれ狂つていた。絶えず忌避していた世間へ、一步踏込んで行かねばならなかつた。「中学生を相手にするのは何だか怕おそしいようです」そう云う彼を先輩は憐あわれむように眺め、「そんなことはありません、余程あなたは世間を怖おそれているのですね、なあに、やってみるまでのことです」と励ましてくるのであつた。その人の家を辞して帰つてくる途中、家の近くの小駅のほとりで、中年の男が着流しで寒々と歩いている佻わびしい後姿を認めた。近所の男であつた。ひどい酒癖がはじまると、隣近所に配給酒を乞こうて歩くが、今も巷ちまたへ出て乏しい酒を漁あさつて帰るところらしかつた。寒々とした夕空がかすかに明るかつた。

……それから間もなく、あの恐しい朝（十二月八日）がやって来たのだった。気を滅入めいらす氷雨ひさめが朝から音もなく降りつづいて、開け放たれた窓の外まで、まるで夕暮のように惨澹さんたんとしていたが、ふと近所のラジオのただならぬ調子が彼の耳じだにピンと来た。スイッチを入れてみると、忽ち狂おしげな軍歌や興奮の声こゑが轟々と室内を搔かき乱した。彼は惘然もうぜんとして、息を潜め、それから氷のようなものが背筋せすじを貫いて走るのを感じた。苛酷かこくな冬が来る、恐しい日は始つたのだ。——彼は身に降りかかるものに対して身構えるように、じつと頑かたくな気持で畳の上に蹲すまっていた。日の暮れる前から何処の家でも申合わせたように雨戸を立ててしまった。黒いカーテンを張りめぐらした部屋ではくつくつと鳥とりな

鍋べが煮えていた。「こんな大戦争が始つたというのに、鳥鍋が
いただけるとは何と幸しあわせなことでしょう」と若い女中のたつは全く
浮々していた。が、妻は震しんが駭がいのあとの発熱を怖れるように愁うれい
沈んでいた。

押入の奥から古びた英語の参考書を取り出して、彼はぼんやり眺なが
めていた。久しく忘れていた英語を憶おもい出そうとするように、あ
ちこちの頁ページをめくっていると、ふと昔の教室の姿が浮ぶ。円味まるみを
帯びた柔かな声で流りゆう暢うちようにリーダーを読み了おわった先生は、黒い
闇魔帳えんまちようをひらいて、鉛筆でそつと名列の上をさぐっている。中
学生の彼は息をのみ、自分があてられそうなを心の中で一生懸

命防ごうとしている。先生の鉛筆は宙を迷いなかなか指名は決ま
らない。やがて、先生は彼から二三番前の者にあてると、瞬間吻^{ほっ}
としたような顔つきになる。先生は彼の気持は知っているのだ。
孤独で内気な、その中学生に読みをあてれば、どんなに彼が間違^{まちが}
つき、真※^{まっか}になるかをちゃんと呑込^{のみこ}んでいたのだ。だから、どう
しても指名しなければならない場合には、まるで長い躊躇^{ちゆうちよ}躊躇^{ちよ}の
後の止^やむを得ない結果のように、態^{わざ}とぶつきら棒な調子で彼の名
をあてる。あんな微妙な心づかいをする先生は、やはり孤独で内
気な人間なのかもしれない。どうかすると、生徒たちの視線にも
堪えられないような、壊^{こわ}れ易^{やす}いものをそつと内に抱^{いだ}いているよう
なところがあり、それでいて、粘り強い意志を研^とぎ澄ましている

人のようだった。……いつも周囲には獣のような生徒がいて、無意味なことを騒ぎ廻っていた。それでなくても、彼にはこの世の中に生れて来たことが不思議に堪えがたいものようになっていたが、学校の厭いやな空気はともすれば、居たたまらないものになっていた。それだから、彼はよく学校を休んだ。それは大概冬の日のことであつたが、家でひとり静かに休息をとり、久し振りに学校へ出て行くと、彼の魂も、肉体もそれから周囲の様子まで少し新鮮になつていた。黒い服を着て大きな眼鏡をした先生は、彼の欠席していたことについては何も訊たずねようとしなかつた。

——彼は久し振りに学校へ出掛けて行く中学生のようであつたが、その昔の中学生がまだ根強く心の隅すみはびこに蔓はびこっているのであつた。

就職が決まりそうになると、女中のたつは、この生活の変化にひどく弾みはずをもち、靴下や手袋を新しく買いととのえて来てくれた。弁当箱も、それはこの頃既に巷から影を潜めていたが、どうやら手に入れることが出来た。

とらえどころのない空がどこまでも続いており、単調な坂路がはるかに展がっている。その風景は寒くて凍いてついていたが、どこかにまだギラギラと燃える海や青野の悶もだえを潜めているようで、ふと眩まぶしく強烈なものが、すぐ足もとにも感じられた。空漠くうぼくとしたなかにあつて、荒れ狂うものに攫さらわれまいとしているし、徑みちや枯木も鋭い抵抗の表情をもっていた。だが、すべてはさり気な

く、冬の朝日に洗われて静まっている。

坂の中ほどまでやって来ると、視野が改まり、向うに中学の色褪せた校舎が見えたが、彼の脚はひだるく熱っぽかった。家を出て電車で二十分、ここまで来ただけで、もうそんなに疲労するのだったが（荒天悪路だ、この坂を往かねばならぬのだ）と、彼は使い慣れぬ筋肉を酷使するように、速い足どりで歩いた。その癖、自分の魂は壊れもののおずおずと運んでいるのもあった。彼には今の家に置いて来たもう一つの姿が頻りに気に懸った。それは今もじつと書斎の机に凭り、——彼方から彼の心の隅を射抜こうとしている。戸惑った表情の儘、前屈みの姿勢でせかせかと歩いている姿は、かえって何か影のように稀薄なものに想われ

て来る。彼は背後に、附纏つきまとう書齋からの視線を避のがれるように急いで中学の門へ這入って行く。そうして、その小さな門を潜くぐった瞬間から、ともかくあの書齋からつき纏つきまとつて来たものと別れることが出来た。だが、そのかわり今度は更に錯綜さくそうした視線の下に彼は剥出むきだしで晒さらされるのであった。

——その夜、睡ねむろうとすると、鼻腔びこうにももの臭においがまだしつこく残っているのを彼は感じたが、たしかそれは今日の昼間、小使室で弁当を食べた時嗅かいだものに他ほかならなかった。その日、はじめて彼も教員室へ入ったが、そこにはいろんな年配のさまざまの容ようぼう貌ぼうをした教師たちが絶えず出入していた。弁当の時間になると、日南の狭い小使室に皆はそろそろと集っていた。彼はその部

屋の片隅で、佗しいものの臭い——それは毛糸か何かれんたんが煉炭れんたんで焦げるような臭いであつた——を感じた。家へ戻ると早速さつそく、彼はその臭いの佗しさを病妻に語つた。妻は頬笑ほほえみながら「そんなに佗しいのなら、勤めなきやいいでしょう」と労いたわるように云つた。長い間、人なかに出たことのない彼にとつては、人間の臭いの生々しさが、まず神経を搔かき乱すのであつた。……ふと、昼間の光景が睡ねつけない闇やみの中に描かれた。階段を昇つて、ザラザラの廊下を行くと、黄色く汚れた窓の中に少年たちのいきれが立こもつていた。そつと、教室の後の方の入口から這入つて行つたのに、忽たちまち四十あまりの顔と眼鼻が一斉に振返つて彼の方へ注がれた。その視線のなかには、火のように嶮けわしいものも混つていた。

彼はかすかに青ざめてゆく自分を意識した。睡つけない闇のなかには、いつまでも何かはつきりしないものの像が揺れかえっていた。彼等^らはどうした貌^{かお}なのだろう、なにを感じな^なに為^なろうとする姿なのだろう。

それはひどい雪の降っている朝のことだった。彼は電車の中で昂^{こうぜん}然とした姿勢の軍人の顔をつくづく眺めていた。人々は強いて昂然としているらしかったが、雪に鎖^{とぎ}された窓の外の景色は、混濁した海を控えていて、ひそかに暗い愁^{うれ}いを湛^たえているのだった。道すがら雪は容赦なく靴のやぶれから彼の足にしみていたが、泥^でい^い凜^{ねい}の中をリヤカーで病人を運んで来る百姓の姿も——更に悲惨

な日の前触のように、彼の心を衝くのだった。坂路のあちこちには、バタバタと汚れた紙片が貼はつてあつて、それには烈しい、そして空虚な文字が誌しされていた。……寒さと慣れない仕事にうち克かつたためには、彼は絶えず背中をピンと張りつめていなければならなかつた。教員室には、普通の家庭で使用する煉炭れんたん火鉢ひばちが一つ置いてあつた。その貧弱な火をとり囲んで教師達は頻しきりにガヤガヤと談じ合つた。そういう佗たしいなかに交つてみると、彼はふと、家に置忘れて来た自分の姿を振返ることがあつた。長い間かかつて、人生の隱微なるものの姿を把とらえようとしていたのに、それらはもうあのままに放置されてあつた。学校から帰つて来る彼の姿には外の新鮮な空気が附着しているのであろうか、妻は珍し

げに彼を眺め、病んでいる彼女の顔にも前には見られなかった明るみが添った。行列に加わってものを買って帰ると、妻の喜びは一層大きかった。

ある朝、一羽の大きな鳥が運動場の枯木に来てとまった。あたりは今、妙にひっそりしていたが、枯木にいる鳥はゆつくりと孤独を娯^{たの}しんでいるように枝から枝へと移り歩いている。その落着はらった動作は見ているうちに羨^{うらやま}しくなるのであった。こういう静かな時刻というのも、あるにはあつたのか。彼はその孤独な鳥の姿がしみじみと眼に泌^しみるのだった。……この運動場の砂は絶えず吹き荒^すさぶ風のために、一尺から窪^{くぼ}んでしまったのです、と

ある教師が語ったことがある。絶えず吹き荒さぶものは風ばかりではなかった。無慙むざんな季節あおに煽られて、生徒達はひどく騒々しく殺伐になっていた。旗行列の準備で学校中が沸騰している時も、彼はひとり職員室に残りぼんやりと異端者の位置にいた。もしも、こういう時代に自分が中学生だったら……と、彼はいつもそれをおうとぞつとする。そうして、生徒たちにもものを教えていながらも、ふと向うの席に紛れている己おのれの中学生姿を見ることがあった。異端者の言葉がすぐ、口もとまで出かかっているのであった。

(昭和二十一年九月号『文明』)

青空文庫情報

底本：「夏の花・心願の国」新潮文庫、新潮社

1973（昭和48）年7月30日初版発行

入力…tatsuki

校正：林 幸雄

2002年1月1日公開

2011年2月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

冬日記

原民喜

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>